

観賞用爬虫類について (第3回移入種対策小委員会ヒアリング)

安川雄一郎 2003.04.15.

第3回移入種対策小委員会ヒアリングとして、観賞用の爬虫類としては日本国内でも最も多数飼育され、輸入量が多いカメ類を対象に、その背景、問題点、対策等について話します。

日本国内に分布する陸産カメ類とその生息情况

日本産の在来の陸産カメ類(淡水棲ないし陸棲のカメ類)は、イシガメ科(バタグールガメ科)の4属5種、スッポン科の1属1種の計6種からなる。それらの内、2種は日本の固有種で、2種は固有亜種、それ以外の2種も独立の亜種として認識できる可能性があり、全体として固有性の高い極めて貴重な存在である(表1)。

リュウキュウヤマガメとセマルハコガメの2種は、地域を定めずに天然記念物として保護されており、環境庁の「レッドデータブック」(2000)でも絶滅危惧Ⅱ類とされている。しかし、世界的に見た場合、例えばIUCN(国際自然保護連合)の「Red List」では絶滅の危険度はより高いと評価されており、これら6種のうち、4種が絶滅危惧ⅠB類、1種が絶滅危惧Ⅱ類、1種が準絶滅危惧と評価されている。日本国内のクサガメとミナミシガメは比較的個体数が多いとされ、現在国内法によって種レベルでは保護されておらず、環境庁の「レッドデータブック」への掲載もい。しかし、これら2種は中国等の国外では個体数が激減しており、日本国内の個体群は比較的健全な状態で残された非常に貴重なものである。また、こうした状況から、セマルハコガメ(2000)とミナミシガメ(2002)に関しては、近年CITES(ワシントン条約)の附属書Ⅱに含められた(表1)。

また、これら以外に日本近海には2科5属6種のウミガメ類が生息している。しかし、ウミガメ類は一般家庭で飼育されることは少なく、国外からの輸入はCITES等で陸産カメ類に比べるとはるかに厳重に規制されており、移入動物として問題になることは少ないと思われるので割愛する。

表1 日本の陸産カメ類

	天然記念物	CITES	環境庁 RDB	IUCN Red List	備考
イシガメ科					
リュウキュウヤマガメ	国指定		絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	固有種
セマルハコガメ	国指定	Ⅱ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	固有亜種
ニホンイシガメ				準絶滅危惧	固有種
ミナミシガメ	京都市	Ⅱ		絶滅危惧ⅠB類	固有亜種(八重山産)
クサガメ				絶滅危惧ⅠB類	固有亜種の可能性
スッポン科					
スッポン				絶滅危惧Ⅱ類	固有亜種の可能性

現在知られている移入カメ類

現在確認されているだけで、本来日本国内には分布しないヌマガメ科のミシシippアカミミガメ、カミツキガメ科のホクベアカミツキガメが定着している。その他、中国(台湾を含む)から日本産とは同種だが、別亜種、あるいは将来的に別亜種等として分類される可能性がある分化した個体群が移入され定着している種に、スッポン、ミナミシガメがある。また、クサガメ、セマルハコガメについても外国の個体群に由来する移入が行なわれており、一部定着している可能性が高い(表2)。

また、日本国内での移動により、本来分布していない地域に移入・定着した例が、奄美諸島のスッポン、沖縄諸島や宮古島のミナミシガメ、沖縄島、喜界島、北海道のクサガメ、沖縄島のセマルハコガメで知られている(表2)。

こうした移入カメ類はスッポンを除いて、ペット用や観賞用の目的で輸入あるいは、国内で移動された個体に由来している。なお、スッポンに関しては、養殖目的で持ち込まれ、養殖場やその跡地から逃亡した個体が定着している。その一方で、スッポンの幼体はペットとしても大量に販売されており、そうした個体に由来する移入・定着も今後起こる可能性が否定できない。なお、いずれの種でも、意図的導入の試みは現時点では知られていない。

表2 日本国内にすでに定着している陸産カメ類

種名 (科名)	移入元	移入先
外国から		
ミナミイシガメ (イシガメ科)	中国 (台湾?)	京都, 滋賀, 大阪
?クサガメ (イシガメ科)	中国	日本本土
?セマルハコガメ (イシガメ科)	中国	沖縄島
ミシシippアカミミガメ (ヌマガメ科)	北米	日本本土, 琉球列島
ホクベイカミツキガメ (カミツキガメ科)	北米	本州 (千葉県印旛沼周辺他)
スッポン (スッポン科)	台湾	沖縄諸島, 八重山諸島, 大東諸島
日本国内から		
ミナミシガメ (イシガメ科)	八重山諸島	沖縄諸島, 宮古島
クサガメ (イシガメ科)	本州, 四国, 九州	沖縄島, 喜界島, 北海道
?セマルハコガメ (イシガメ科)	八重山諸島	沖縄島
スッポン (スッポン科)	九州	奄美諸島

陸産カメ類が移入動物として注意を要する理由

1 日本の気候への適合性

日本本土や沖縄の野外飼育施設や、屋外での飼育者からの情報によれば

(1) 外国産でも温帯性、亜熱帯性の種は生息地の気候が日本の気候に近く、定着が可能。

(2) 熱帯性の種でも日本本土の夏の気候では生存・繁殖でき、暖房の影響や温泉の存在から暖かさが保たれる場所では越冬可能な種がいる。さらに琉球列島や小笠原諸島には、熱帯性の種も多くが定着できる。

2 その他の生物的特性

(1) 幅広い食性と食物についての順応性の高さ

カメ類は一般に特定の食物を専食することが少なく、食物に関して広い選択肢と適応性を持つので、本来の生息地以外でも、その地域で利用可能な食物に適応できる。また、日本と同じ温帯、亜熱帯域に生息している種は、原産地でも日本国内と類似した環境に生息しており、種は異なっても代用となる餌生物が多い。

(2) 長寿命と長期の繁殖可能期間

カメ類は20-30年以上の寿命を持ち、特に長寿な種では50年以上生きることがある。さらに、多くの種が数年から十数年程度で性成熟し、その後ほぼ一生に渡り生殖可能である。

(3) 精子の貯蔵能力

多くの種の雌は、精子を体内に蓄え、年々受精率は落ちるものの、交尾してから数年に渡って受精卵を産むことができる。また、多くの種で、雌雄の交尾は、冬期に低温で活動性が特に落ちる時期を除き、年間を通して行なわれる。

(4) 長期的な移動能力の高さ

動きの鈍いイメージの強いカメだが、年間を通してみると広い地域を徘徊・移動する。特に水棲種では河川や湖沼の岸に沿って長距離の移動を行なうことがある。そのため例えば放逐された個体の密度が低くても長期的には雌雄が出会って交尾し、繁殖する可能性がある。

(5) 成体に対する天敵の不在

本来の生息地ではワニ、大型のカメ、カワウソ、大型魚等、成体に対して捕食者がいる種でも、日本国内では成体の天敵になるような動物はいない。

以上のことから、ごく少数の個体の放逐されただけでも、それらはその地域で食物を確保し、ある程度成長すれば天敵もいなくなり、長い生殖可能時期の間に、広い地域を移動して交尾相手と出会い、その後数年に渡って雌が受精卵を産み続ける可能性がある。極端に言えば、たと